



女性学研究センター年次報告・2007年度

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田間, 泰子, 伊田, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10126

女性学研究センター年次報告・2007年度

1. 運営体制

- 所長 黒田研二（人間社会学研究科長）
- 主任 田間泰子
- 副主任 伊田久美子
- 共同研究員 浅井美智子・酒井隆史・福田珠己・村田京子・森岡正博・
渡辺博明（後期留学中）（人間科学科）、
東優子・山中京子（社会福祉学科）、
熊安貴美江（総合教育研究機構）
- 学外研究員 足立真理子（お茶の水女子大学）、木村涼子（大阪大学）
古久保さくら（大阪市立大学）
- 運営委員（所長・主任・副主任のほか）
秋庭裕（人間科学科）、ケイン・ケビン（言語文化学科）、
児島亜紀子（社会福祉学科）
- 事務職員 伊藤ゆきこ

2. 授業

A. 新カリキュラム

・大学院科目（人間社会学研究科）

「学際現代人間社会論演習Ⅰ」（通年4単位。伊田久美子・田間泰子・
森岡正博）

「ジェンダー特論1A」「同1B」（半期2単位ずつ。伊田久美子）

「同2A」「同2B」（半期2単位ずつ。田間泰子）

・専門科目（学部科目）

「ジェンダーと社会」（半期2単位。伊田久美子）

「ジェンダーとスポーツ」（半期2単位。熊安貴美江）

「ジェンダーと社会思想」（半期2単位。浅井美智子）

「ジェンダーと教育」（半期2単位。堀内真由美）

・教養科目（機構提供科目）

「ジェンダー論への招待」（前期 2 単位。浅井美智子・伊田久美子・熊安貴美江・児島亜紀子・酒井隆史・東優子・村田京子・森岡正博・山中京子・渡辺博明）

「ジェンダー論入門」（後期 2 単位。浅井美智子・伊田久美子・熊安貴美江・酒井隆史・森岡正博）

B. 旧カリキュラム（人文社会学部）

「女性学概論Ⅰ」「同Ⅱ」（半期 2 単位ずつ。新カリキュラム「ジェンダー論への招待」「ジェンダー論入門」に読み替え）

3. 女性学連続講演会・連続セミナー（以下は講演会のタイトル）

第12期『社会的排除とジェンダー』（6月23日～7月22日）

伊田久美子「社会的排除とジェンダーの再構築」

川原恵子「ホームレス問題への福祉対応とジェンダー」

上野千鶴子「女性・高齢者・障害者の社会的排除（エクスクルージョン）」

松田博幸「セルフヘルプ・グループとジェンダー」

神原文子「子づれシングルと子どもたち—貧困のメカニズム」

4. 女性学研究コロキウム

第1回：「文学とジェンダー 19世紀フランス・ロマン主義時代の女性作家たち」（12月8日。本誌掲載）

「マリー・ダグー伯爵夫人の生涯と作品—小説『ネリダ』における事実とフィクション」

発表者：坂本千代（神戸大学教授）

「デルフィーヌ・ド・ジラルダンの生涯とその作品—「ロマン派のミューズ」からジャーナリストへ」

発表者：村田京子（本研究センター研究員）

第2回：「エチオピアにおけるFGM（女性性器切除）とジェンダーをめぐる諸問題（仮題）」

発表者：宮脇幸生（本学准教授）（2月7日。来年度に掲載予

定)

第3回：「生政治とアイデンティティ——ナショナリズムとジェンダー理解のオルターナティブをめざして（仮題）」

発表者：ジュディット・ルベル（パリ第1大学準教授）（3月26日。大阪大学グローバルCOEとの共催。内容は大阪大学グローバルCOEによる報告書に掲載予定）

5. 国際交流事業（詳しい内容は報告書として別途刊行）

①韓国・梨花女子大学アジア女性学センター、ソウル特別市女性家族財団、財団法人アジア太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）との共催により、移住女性に関する2回のシンポジウムを開催した。第1回『女性の人権の視点から見る国際結婚』は8月3日、梨花女子大学において、韓国国家人権委員会の後援を受けた。第2回『移住女性労働者の人権保障を求めて』は10月27日、大阪府立女性総合センター（ドーンセンター）において、財団法人大阪府男女共同参画推進財団の協催を得て実施した。

②上記①の交流を基盤として、梨花女子大学が中心となる移住女性の問題に関する事業に参画することになった。この事業は、アジア地域内部の移住女性送出国と移住女性を受け入れる国の経済的格差、それによる国家別の社会的変化、特に家族構造の変化に焦点を当てて、より多くのアジア国家の関連研究者またNGO活動家、政策担当者たちが会う国際シンポジウムと専門家ワークショップを開くものである。この財源助成のためJapan Foundationに補助金を申請中である。

6. 男女共同参画事業

①2006年度に行なったシンポジウム『大阪の女性労働』（12月16日、於ドーンセンター）の記録集を刊行した。

②JCB、KUMON、阪急百貨店、UCC、および学生有志による実行委員会として、就職支援室と「府大ナビ」の協力を得て、学生対象の就職関連イベント『働く先輩社員もホンネでトーク』を開催した（10月9

日、於学術交流会館。概略は本誌掲載)。

7. 図書・文献資料の収集

- ①外国語文献資料ならびに新刊邦語文献を中心に収集した。諸雑誌の購読も継続している。
- ②フェミニスト・飯島愛子関連資料が寄贈されたので、閲覧に供するため整理中である。
- ③交流のあった梨花女子大学から、アジアの女性学に関連する図書6冊が寄贈された。
- ④『女性学研究』に引き続き、連続講演会の記録集もISSNを取得した。

8. その他

- ①センターのホームページは、新しいURLを取得した。全国の女性学およびジェンダー研究センターの情報をリンク集として掲載している。
<http://www.human.osakafu-u.ac.jp/w-center/>
- ②大阪府生活文化部男女共同参画課が設立した「おおさか男女共同参画促進プラットフォーム」にセンターとして参加した。また、同課からプラットフォームの活動に連動した受託研究を引き受け、大阪府内の大学生対象（10月実施）および一般府民対象（12月実施）のアンケート調査を行なった。センター研究員と他大学の教員の方々の協力を得たことに、この場を借りて謝意を表します。アンケート結果については年度末に簡単な報告書を作成し、関係各部署に配付を行なった。
- ③お茶の水女子大学が拠点となっている全国大学附設および財団立の女性学・ジェンダー研究所・センター・ネットワークに参加した。このネットワークは、今後、日本学術会議社会学委員会ジェンダー学分科会、同史学委員会歴史学とジェンダーに関する分科会と、ジェンダー関連の諸学会・研究会によって構成されている「ジェンダー学連絡協議会」に参加することとなった。
- ④『女性学研究』に査読のある投稿枠を設ける方向で、体制を検討中である。

- ⑤ 3月末には新棟へ移転するため、その情報を掲載した新しいパンフレットを作成中である。
- ⑥ センターを拠点とする共同プロジェクト「身体グローバリゼーションジェンダーの視点から」を、研究員有志8名（田間（代表者）、浅井・伊田・児島・酒井・福田・村田・森岡）によって科研基盤研究（B）に申請した。

* * *

今年度は、中百舌鳥キャンパスに移転して1年目、そして学術情報センター内の図書館2階研修室をお借りして過ごした1年間でした。1年後の2008年4月には総合教育研究棟への移転が決定していたため、完全に荷解きしないままに活動を始めましたが、おかげさまで6月の連続講演会・連続セミナーをはじめとして、数多くの事業を無事終了することができました。スタッフ一同、心から感謝しております。

今年度事業の特徴としては、学内の方々にご協力いただいただけでなく、広く学外との連携を行なえた点が挙げられます。まず、昨年度末に財団法人アジア太平洋人権情報センターからお話をいただき、参加させていただいた日韓連続シンポジウムは、三年前まで当センターと交流のあった韓国・梨花女子大学との共催であるだけでなく、国内NGO、および韓国・ソウル特別市女性家族財団との初共催でもありました。8月にソウルで行なわれた第1回シンポジウムも、10月に大阪で行なった第2回シンポジウムも、多くの方々のご参加を得て盛況に終わりました。さまざまな側面でグローバリゼーションが加速する現在、センターの活動も今後、大学や国内という枠を超えてジェンダー問題を展開してゆく必要があることを感じました。その後、梨花女子大学が中心となって、外務省のJapan Foundationに来年度以降の共同研究費の申請を行なっています。

春から企業の方々と企画し、学生有志も巻き込んで実行した就職活動イベント「働く先輩社員もホンネでトーク」も、センターとして初めての試みでした。本学には就職支援室がありますので、ご協力をいただき誠に感

謝しております。概要を本誌に掲載していますが、従来の企業による就職イベントとは全く異なり、「ロールモデル」を各社人事部から派遣していただき、少人数のセッションによって「自分らしい働き方」をホンネで話し合うというものでした。学生さんたちの感想は非常に好評で、一年生から、また理系企業など他職種でも、また行なってほしいという声をいただきました。イベントの最初には硬かった学生さんたちの表情が、終わりには笑顔になって「もっと時間がほしかった」と言っていたことが嬉しく心に残っています。なお、このイベントは好評のため、連携企業のメンバーは、引き続き、大阪大学と神戸大学で同様の企画を実施され、やはり大変好評であったとご報告を受けています。

また、9月には明石書店から『フェミニスト・ポリティクスの新展開』が刊行されました。本書の詳しい紹介は、本誌に掲載していますのでご覧いただきたいのですが、大阪女子大学時代にセンターの専任研究員であった足立眞理子さんが中心となり、副主任の伊田久美子と、研究員の木村涼子さん、熊安貴美江さんが尽力されて、在任中のセンターの活動を一冊にまとめたものです。足立さんはお茶の水女子大学に異動されましたが、その足跡がこのようなかたちで実を結んだことを喜ばしく思います。刊行にご協力いただいた多くの方々に感謝します。

最後に大阪府からの受託事業として、10月には、府大以外の、大阪府内の国公私立10大学に昨年度同様のアンケートを実施しました。この時にも、多くの他大学の先生方に快くご協力いただき、短期間で851票を回収しました。大変感謝しております。このアンケートを一部改変したものを、さらに府民一般の方々に12月に調査しました。府民の方々への調査の時には、ウェブ調査を初めて試みました。これらの結果は、年度末に簡単な報告をまとめ、来年度にさらに追加調査を行なって報告書にまとめる予定です。

このように、今年度は、学内外の大変多くの方々にご協力いただき、さまざまな事業を成功裏に終えることができました。今後もスタッフ一同努力してまいりますので、みなさまにはセンターの歩みにご同伴いただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

* * *

さて、2008年4月からは総合教育研究棟で活動を開始します。この新しい出発にあたり、これまでの当センターの歴史を簡単にではありますが振り返っておきたいと思います。

センターの原点は、1982年の「女性論」講座（その後委員会が設置され、「女性学」となる）の発足にあります。これは女性学が日本で普及しはじめた時代にあって先駆的で、歴史ある公立女子大学にふさわしいものでした。学生対象の授業のみならず、一般府民にも開かれた講座は、学内外の多くの女性たちに希望の光を与えました。1990年には、藤江喜美子委員長や田川建三先生をはじめ研究員の方々のご尽力が実り、女性学研究資料室の開設が実現しました。資料室という一つの場所を得ることは大変なことですが、それが果たした役割は資料収集にとどまらず、女性学の活動拠点として実に大きいものでした。1991年度から、紀要『女性学研究』が刊行されています。そして、学外の研究者を招聘して行なう少人数の研究会「コロキウム」を資料室の時代から行ない、『女性学研究』にその成果を掲載することになりました。

1996年度に資料室は全学附置の研究センターとして、70周年記念ホールの一 corner に新たに拠点を置きました。これにより活動はいっそう充実し、「連続講演会・連続セミナー」を開始して、その記録集『女性学連続講演会：より深く掘り下げるために』も刊行を開始しました。

しかし、2005年には大阪府立大学および大阪府立看護大学との統合が行なわれ、共学の大阪府立大学においては、人間社会学研究科附置の研究センターとして再出発することになりました。その後、女子大のあった大仙キャンパスから中百舌鳥キャンパスへの移転を経て、現在に到っています。

研究センターとして12年、「女性論」講座の時代に遡れば26年にも及ぶ歴史は、本当に多くの方々のご尽力があってこそ可能でした。その全ての方々のお名前をここに記すことは到底及びませんが、下記に中心となられたの方々のお名前を挙げさせていただき、皆様に心から感謝の意を表すものであります。本当に有難うございました。

【大阪女子大学】

・女性論講座委員会時代

委員長 藤江喜美子 (1985年4月～1990年3月)

・女性学研究資料室時代

室長 藤江喜美子 (1990年4月～1994年3月)

田川 建三 (1994年4月～1996年10月)

・女性学研究センター時代

主任 田川 建三 (1996年11月～1997年3月)

船橋 邦子 (1997年4月～2001年4月。1996年12月～2001年4月は専任研究員として在任)

萩原 弘子 (2001年5月～2002年3月。兼任研究員)

足立真理子 (2002年4月～2005年3月。専任研究員)

事務補佐 敦賀美奈子 (1996年11月～1999年3月)

伊藤ゆきこ (1999年4月～2005年3月)

【大阪府立大学】

主任 伊田久美子 (2005年4月～2007年3月)

田間 泰子 (2007年4月～現在)

副主任 足立真理子 (2005年4月～2005年9月)

田間 泰子 (2005年10月～2007年3月)

伊田久美子 (2007年4月～現在)

事務 伊藤ゆきこ (2005年4月～現在)

(敬称略。事務担当はセンターが発足してからのみ記載しています)

なお、以上については過去の『女性学研究』に遡って確認し記載しておりますが、思わぬ誤りもあると思います。ご発見の際には、お手数ですがセンターまでどうぞお知らせください。次年度の年次報告にて訂正いたします。

(田間泰子・伊田久美子)